

富山大エコチル調査富山ユニット
センターの稲寺秀邦名誉教授らのグループは6日、母親の妊娠前の体格指数（BMI）と妊娠中の体重増加量が、母乳の量に影響を与えるとの調査結果を発表した。

富山大グループ 調査結果を発表

環境省の「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」の一環で、8万2129人を対象に実施。妊娠前のBMIを低体重、普通体重、肥満、妊娠中の体重増加量を不十分、適正、過剰とそれぞれ3

妊婦の体重 母乳量に影響

グループに分類した。

妊娠前に低体重から普通体重だった女性は、妊娠中の体重増加量が不十分または過剰の場合、母乳が出にくくなり、生後6カ月までの母乳育児が継続できないリスクが高かった。妊娠前に肥満だった女性は体重増加量に関わらず、母乳が出にくくなることも分かった。調査結果は3月に英医学誌に掲載された。

世界保健機関（WHO）は、赤ちゃんの感染症を予防し、母親の卵巣がんや乳がんの発症率を下げるとして生後6カ月までの母乳育児を推奨している。